

調査広報部

変容を見取るための手立て

分析・考察

ルーブリック評価・アンケート等による実態把握（集団の変容と個の変容）

評価

計画・立案

授業研究部・環境整備部との連携

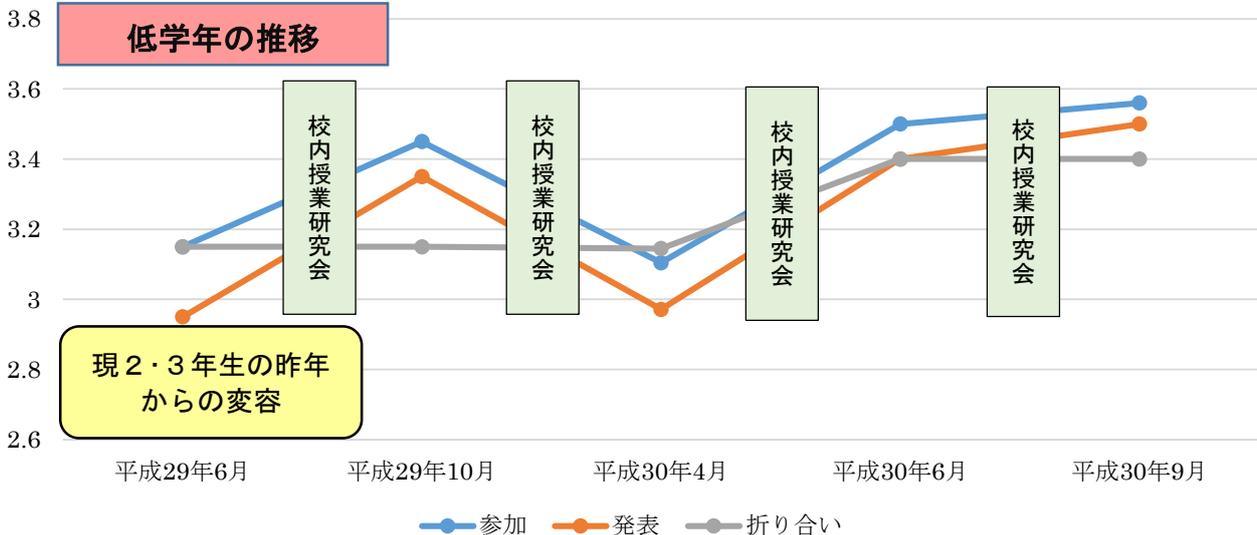
授業実践（学活・各教科）

【児童のルーブリック評価】

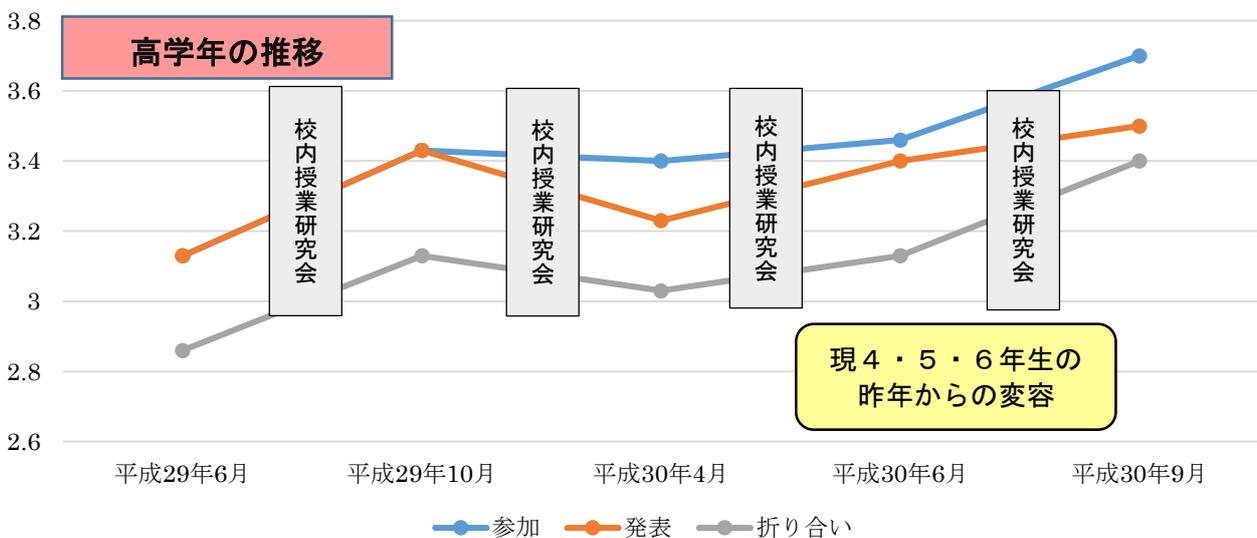
番号	項目	4	3
1	参加	話合いの意義や価値を認め、意欲的に話合いに参加できる。	話合いの意義や価値を認め、話合いに参加できる。
2	発表	自分の意見に理由をつけて、友達にわかりやすく発表できる。	自分の意見に理由をつけて発表できる。
5	折り合い	友だちの意見のよいところを見つけ、自分の考えを再検討し、よりよい意見に修正することができる。	友だちの意見のよいところを見つけ、自分の考えと比べ、話合いをまとめることができる。

『主体的・協働的で創造的な活動』を通して、児童の自己肯定感や自己有用感がどう変容しているかなど、児童の取組への意識の見える化を図るために、ルーブリック評価を取り入れた。

低学年の推移



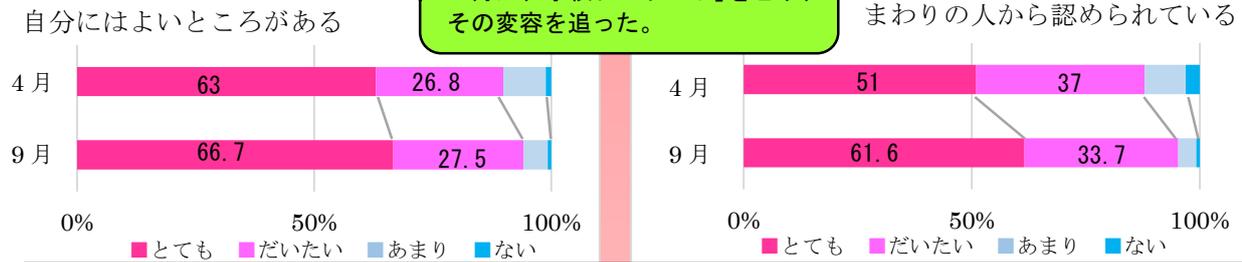
高学年の推移



○ルーブリック評価から、授業研究会を重ねるごとに児童の学級会への参加意欲、発表の仕方、折り合いの付け方などが向上していることがわかる。
 ○年度が変わってすぐの調査でポイントがやや下がったものの、その後、前学年で学んだことや経験を生かし、それぞれのポイントが向上している。

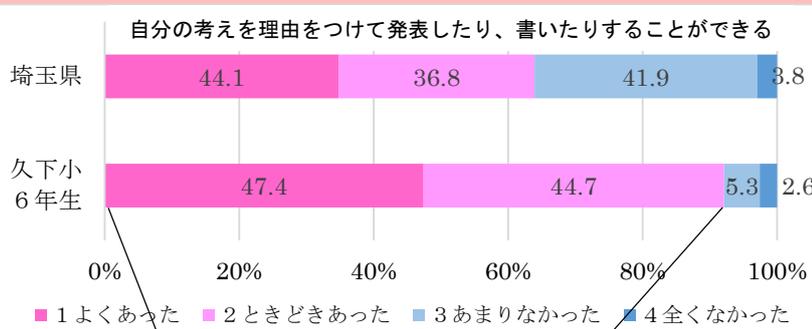
【学校アンケート】

新年度が始まってすぐの4月と9月に、「学校アンケート」をとり、その変容を追った。



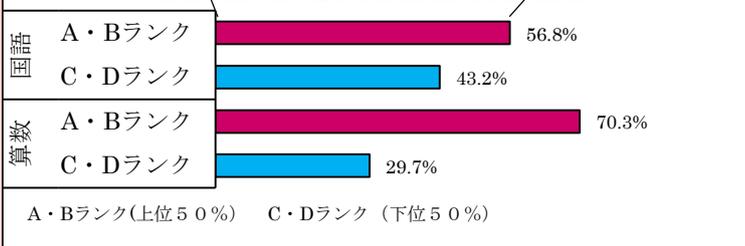
- 話し合い活動や学び合いを通して、自分の意見が認められることが増えたことから、「自分にはよいところがある」=自己肯定感の向上につながったと考えられる。
- 話し合い活動を通して、発表する力がついてきたことと聞くことへの意識の向上により、「周りの人から認められている」=自己有用感のポイントが向上したと考えられる。

【県学調アンケート結果】



- 「自分の考えを理由をつけて発表したり、書いたりすることができる」の項目では、「よくあった」「ときどきあった」の割合が、県平均より11.2ポイントも高い。
- 学級会を通して、理由を付けて発表することの積み重ねから、各教科でも、自分の考えを理由を付けて発表したり書いたりできるようになっていることがわかる。

発表したり書いたりできる児童の学力の伸び



6年生の県学調のアンケート「自分の考えを理由をつけて発表したり、書いたりすることができる」で、「できる」と答えた児童と、その児童の学力の伸びをクロス集計した。

- 「発表したり書いたりできる児童の学力の伸び」のクロス集計から、発表したり書いたりできると答えた児童のうち、国語では約57%、算数では約70%の児童に、学力の向上が見られた。
- 学級活動等で、発表したり書いたりする力が付くことと、学力の向上とが結び付いていることがわかる。

Ⅲ 成果と課題

- 話し合いや学び合いを通して、認め合う場面が増え、自信へとつながり、自己肯定感、自己有用感が高まった。
- 学級活動の話し合いにおいて培われた理由を付けて発表する力が、教科等の学び合いの際にも生かされ、学力の向上につながった。
- 教科等においてさまざまな形態の学び合いをしたことによって、自分の考えを発表することに対して意欲的になってきた。
- 集会活動の司会等をマイクを使わずに行うことによって、大きな声で自信をもって発表することができるようになってきた。
- 学級会や教科等での学び合い、ノート表彰など、互いの考えを伝え合ったり、互いのよさを認め合ったりする取組をさらに積み重ね、自己肯定感をどの子ももてるよう指導していく。
- 教科等においても、学級会と同じように児童が主体的に話し合うことができるよう多様な学び合いを取り入れた授業を工夫し、学習の質を高めていく必要がある。